十日町市U・Iターン情報誌

DECEMBER 2020

vol. 02

I'm home! Tokamachi

わたしがわたしに、帰る場所。

新潟県十日町市× TURNS

contents

03
あなたは何タイプ？ U・Iターン移住診断チャート

04
U・Iターン移住者インタビュー
やってみればいいじゃん！から始まる十日町
若井沙穂子さん

05
地域おこし協力隊がつくる新しい移住のカタチ
第二のふるさとは、自分で決める
山口洋樹さん

06
山で暮らす心得
雲の上の集落、会沢・蓬平集落
小山友誉さん

08
子育てと教育を考える 子育て世代の座談会・後編

09
子育てスポット特集

10
十日町市の特色ある教育
まつのやま学園
久保田智恵美さん

12
移住と起業のストーリー
同じ体験を共有する喜びを知り、新たな挑戦へ
嶋村彰さん・塩倉チーム

14
テレワークで働く
アフターコロナ時代の新しい働き方を十日町でも
川島真理子さん

15
ワークスペース特集

16
出身者インタビュー
とおかまちに帰りたい人々
村山凛太郎さん

17
企業の新たな挑戦
とおかまちで育てる新しいイチゴ
花水農産

18
あなたの新しい暮らしを支援
補助金制度の紹介
とおかまちのしごと、求人を紹介するウェブサイトが始まります！

19
Information
移住体験プログラム
お試し地域おこし協力隊

あなたは何タイプ？
移住診断チャート

Start!

Q. やりたいことがある

No

Q. 趣味の時間を大事にしたい

Q. 子育てに自然が必要 → 06

Q. 人間関係は得意 → 05

Q. 社会貢献がしたい → 04

→ 03

Yes

Q. 地域活性化に興味がある

Q. 地域経済に貢献したい

Q. 家業や既存産業を継ぎたい

→ 01

Q. 都会の生活も好きだ

Q. 自分の能力を生かしたい

Q. 自分でビジネスを始めたい

→ 02

06 family type

のびのび子育て

子供を自然環境の中で育てたい。理想はあるけど、現実的な部分で不安がある。子育て世代のリアルな話を聞いてみよう。

05 Relationship type

関係人口

都市圏の仕事も暮らしも嫌いじゃない。まずは副業やイベントをキッカケに地域社会との関わりを作ろう。二拠点居住も◎。

04 Community building type

まちづくり

十日町をもっと良くしたい。得意な分野が活かせる市民活動の団体も探してみよう。地域おこし協力隊もオススメ！

03 Slow Life type

スローライフ

都会より地方でのんびりした暮らしたい。支出を見直し、収入源を確保しよう。農を生活に取り入れてみるのも良いかも。

02 Changing type

環境変化転職

今の状況を変えたい。地元に戻って働きたい人。仕事がないと言われているけど、能力やスキルを活かして職場を探そう。

01 Start-up type

起業継業

仕事のやり甲斐と暮らしの両方を充実させたい。地域の余白はまだまだ多い。活躍するフィールドを自分でつくろう！

古民家カフェ澁い　バリスタ　Iターン

若井沙穂子さん

1988年3月11日生まれ。東京都板橋区出身。高校卒業後、オーストラリアのメルボルンの大学へ進学。コミュニケーションデザイングラフィック専攻。帰国後は都内印刷会社にデザイナーとして就職。その後、再びバリスタ修行のためにオーストラリアへ。現在は松代にあるレストラン「カールベンクス古民家カフェ澁い」で働く。

U・Iターン移住者インタビュー

「やってみたらいいじゃん！」から始まる十日町

「なぜ、十日町に移住したの？」Iターンで移住した方は必ず聞かれるでしょう。地元の人は不思議で仕方がないのです。『袖振れあうのも他生の縁』という言葉の通り『縁』が繋がって、その人はそこにいます。若井紗穂子さんもその1人。

「オーストラリアでバリスタになって日本に帰ってきたとき、新潟でバリスタをやりたいって思ったんです」若井さんの両親は湯沢にリゾートマンションを持っていて、新潟に馴染みは幼少期からありました。幼い頃に触れた雪、魚沼の自然が彼女との縁を繋ぎました。

「いつか自分でコーヒーを淹れて出店したい」と近所に住んでいた人に話した時「やってみればいいじゃん！」と返ってきて、驚きと共に「やってもいいんだ」という気持ちが芽生えたといいます。1人1人が埋もれてしまう都心では、そういった機会は多くありません。でも、この十日町という場所で何かを始めることは、そんなに難しいことではないように思います。

「紹介してもらった方のイベントに初めて出店してから、身の回りが変わり始めて」大きな変化があったのは「大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ2018」の時でした。企画展の1つを運営してもらえないかという依頼があり、東京の有名コーヒー店とコラボレーションが実現したのです。

「バリスタになった後、東京にいたら、こういう機会には恵まれてなかったと思います」

ライフステージの変化と挑戦

その後、地元男性と結婚した若井さん。移住して4年目、新しい挑戦をします。

「実はウェディング関連のデザイン事務所を始めたくて。プランナーの友人とカフェウェディングのような気軽な結婚式を広めたいんです」結婚式の招待状を自分でデザインしていた時、東京のデザイン事務所で働いていた頃とは違う楽しさに気づいたのだといいます。軽食とコーヒーを出して、結婚する2人も参加者もカジュアルさを楽しむような結婚式が広げられたら、デザイナーとしての自分もバリスタとしての自分も活かせる。そう思いました。この根底にあるのは「やってみたらいいじゃん！」という感覚。それは、これから十日町に来る人にも必要な感覚です。

「迷っているなら来れば良いと思います。オーストラリアも英語がわからずに行きましたけど、行っちゃえばなんとかなるし、仲間もいます。楽しめれば大丈夫。悩んでいる時間がもったいない」と話す笑顔には、少しの不安が見えながらも、このまちなら大丈夫という希望が溢れていました。

地域おこし協力隊がつくる新しいカタチ

第二のふるさとは自分で決める

山口洋樹さんは十日町市馬場の出身。上京して25年が経っていました。家庭を持ち、もうすぐ中学生になる子供もいました。月収は50万円を越え、奥さんも派遣社員として働き、十分に満足のいく暮らしをこれからも東京で送る予定でした。多忙な日々の中、「真っ暗な部屋でテレビを見ている子供」を目にした時、「本当にこのままで良いのか」と不安を覚えたことが転機となりました。

「切ない気持ちがありました。仕事と生活に追われて自分の理想とする家族像を見失っていましたね」

東京ではない別の場所で何かしたい。地元は選択肢になく、妻の実家がある熊本県天草市への移住を考えていた矢先、十日町市の移住セミナーに参加します。他の地域とは違う移住者や行政の熱意に心が動きました。

「何か生み出そうとする熱量が違うなって思ったんです。そういえば、自分は高校までの十日町しか知らない。地元のことを知らないんだなって。実家がある馬場に帰れば甘えが生じるので、縁のない吉田地区に地域密着型の地域おこし協力隊として着任しました」

移住の感覚としてはIターンの人と変わらないといいます。それからの3年間は、地域と協働しながら様々な活動を行ってきました。

協力隊退任後の地域支援員への道

地域おこし協力隊退任後の進路には、いくつかのパターンがあります。起業支援金を活用して新しく事業を始める、企業などへ就職する、そして協力隊時に活動した地域で『地域支援員』として働く道です。

「地域おこし協力隊がプレイヤーなら、地域支援員はコーディネーター。地域のことに精通しているからこそ、次の協力隊の支援を含めて包括的に地域支援の仕事が出来ます」

地域おこし協力隊と違い任期はありません。限られた任期の中で活動する協力隊に比べて、長いスパンで関われる。『地域おこし』を仕事にするための道とも言えるでしょう。

「地域おこし協力隊を退任する時、やっと地域を理解できたからこそ、まだまだ出来ることがあると思いました。それで、支援員として、これからも地域と一緒に歩んでいきたいと思ったんです。」

どんな道を目指すのか、あなたにとっての地域おこしとはなんですか？

吉田地区　地域支援員　Uターン

山口洋樹さん

十日町市馬場出身。東京で25年間主に通信関連の保守管理業に従事。平成28年から地域おこし協力隊として鉢、中手、中平、名ケ山集落を担当。令和元年からは地域支援員として吉田地区全体をコーディネートしている。

一般社団法人里山プロジェクト　代表　Iターン

小山友誉（こやま ともたか）さん

平成22年から3年間、十日町市の地域おこし協力隊として活動。農業や除雪などの地域活動と深く関わり、活動期間中の平成23年東日本大震災、翌日の3.12長野県北部地震（最大震度6強）及び同年7月の新潟福島豪雨並びに任期中の全ての冬において災害救助法が適用された豪雪を、地域の方々と一体となり乗り越えたことで「本物の生きる力」を学ぶ 。総務省地域力創造アドバイザー、株式会社トロノキファーム取締役、（一社）TOC十日町アウトドア体験センター代表など歴任。

山で暮らす心得　「雲の上の集落、会沢・蓬平集落」

新潟県十日町市、会沢・蓬平（あいさわ・よもぎひら）集落。秋の稲刈りを終え、冬を迎える準備が始まった。紅葉を迎える山々の間から、段々に連なる棚田が見える。

目の前の景色は誰の手によって、生み出されているのか。山の斜面に切り拓かれた棚田を見て、今まで考えもしなかった。ここで生きることでしか、感じとることができない営みを知りたい。私たちは、集落の語り手である小山さんと山を巡った

山で生きる覚悟は必要か

北越雪譜※に記された雪国の暮らしが、文明の発展した今も残る豪雪地。それがこの集落の冬だ。海抜399mの山あいからは、しばしば雲を上から見下ろす雲海を眺めることができる。

（※）北越雪譜・・・鈴木牧之が江戸後期の越後魚沼の雪国の生活を活写した書籍。

集落へ続く道を歩くに連れて、傾斜がある道の途中に家がポツリポツリと見えてきた。

「なぜ俺がここに住んでいるかと言うと、山で生きることを教えてくれる師匠がたくさんいるからなんだよね」

そう話すのは、一般社団法人里山プロジェクト（以下、里山プロジェクト）の代表を務める小山友誉さん。彼がこの地に出会ったのは11年前。春には山菜を取り、田んぼで米を作り、畑を耕して、木を切り、冬には雪と暮らす。自然の厳しい里山で、呼吸をするかのように平然とそれらを営み、自分を活かしながら地域を活かす村びとたちの背中に、理想の生き方を見つけた。

正直な話をすると、里山での生活は簡単なことではない。山に囲まれ、四季の移ろいを感じながら、自給自足に近い田舎生活は一朝一夕には成立しない。

蓬平集落の中心にある旧小学校のプラタナスの木の根元に腰をかけ、小山さんは「大雪の時は、タクシーも救急車もなかなか来られないよ」と笑いながら話した。それほどに厳しい里山の暮らしをなぜ続けるのか。シンプルに「幸せな日常と心の平和だよ」と答えた。

幸せな日常とはなんだったろう

小山さんはウィンタースポーツを愛する若者だった。11年前に会沢・蓬平集落の環境と人に触れ、ここに住むことを決めた。地域おこし協力隊を経て、現在は、キャンプ場を運営して、インストラクターや市全体の協力隊事業の業務をおこないながら家族3人で暮らしている。幸せな日常とは「人らしいコミュニケーションが取れる暮らし」だという。例えば、野菜が取れたからと隣へと持っていき、そのお返しに余った料理を持って帰らせ

る。そんな当たり前の日常のやり取りの上にある、良いことも悪いことも全て話せる家族のような『共同体』の中で暮らすことだ。

住む場所にお金がかかり、それを支払うためにお金を稼ぎ、足りなければ食べ物が買えない。いつなくなるか分からない仕事に不安を抱える人は、コロナ渦で増えたのではないか。

そういった「不安」や「焦り」がない生活が成立している。ここで暮らす人たちの個のエネルギーが溢れ、自分たちを生かし、地域を活かしている。「言葉だけではピンとこないかもしれない」と、小山さんは立ち上がり歩き始めた。

雲の上の集落、会沢

雲が海のように広がる景色「雲海」は、標高が高く放射冷却が起こる山間部や盆地で発生しやすい。「あの山の斜面の棚田を管理しているのは80代の爺ちゃんなんだけど、普通じゃ考えられないよね」と小山さんが語りながら着いたのは、そんな雲海がよく発生するという会沢集落。山あいの集落で13世帯ほどが暮らす蓬平集落に隣する集落だ。この日は曇り空で霞が少しだけ漂い、どこか幻想的な世界だった。

その中の1軒の家、庭に広がる里芋と玄関に立てかけられた芋茎。そこにいたお婆さんに小山さんは声をかけると、私たちに村のことを教えてくれた。

「会沢は90歳の人達が中心の世代でね。一番若い人で65歳。みんな農業をやってる。この時期はカボチャに白菜、大根もキャベツも何でもあるよ。キノコもね、家の前に生えてるのよ」と彼女は話した。会沢の野菜は直売所で売られている。その中継ぎをしているのは小山さんだ。1袋100円の野菜でも1日で1万円以上も売れるようになった。「買いにいくのは卵と肉くらいかね」と続ける。昔は鶏も飼っていて、ほとんど自分達で育てたものを食べて暮らす。

「山で暮らす技術を持ったプロフェッショナルな人たちだからね。本人にとっては当たり前なんだけど、俺は全くかなわない」

よく集落は閉鎖的だと聞くが、ここはそう感じさせない空気がある。できない人は助けて当たり前、家族としての関係を築こうとするから、外の人も自然に溶け込めるのだ。

「うちの人、今日は釣りに行ってていなくてね。稲刈り終わったからさ」

「里山の暮らしっていうのは、誰かが欠けたら欠けたままになる。この景色もあらゆる力の集合体なんだよ」眼前に広がる風景を眺めながら、山の暮らしの心得を聞いた。

蓬平集落には、まだまだ若手の担い手がいる。それでも100年後には集落はなくなっているかもしれない。「ここの人達が受け継いできたものが自分も好きだから」と小山さんは一つ、また一つと田んぼを増やしてきた。

誰かができなくなれば「俺がやるよ」って手が挙がる。大事な時は協力する阿吽の呼吸がある。大きな家族としての安心感。それが集落で暮らすことの良さだ。

「山で暮らす自分の能力なんて、最大が100だったら自分は35くらい。本当に凄い山の神様たちがいっぱいいるのよ。自分はなんの役にも、まだ立ててない。郷に入れば郷に従う必要はあるけど、よそ者でも家族として迎えてくれるのが、この集落だよね」

この景色はあらゆる力の集合体

「稲刈りは始めたんか」「いよいよになったら、オラ刈りに行くスケ」と声をかけてくれる。その触れ合いには愛がある。

山で暮らすために必要なことを聞くと「感じること、それだけだね」と短く答えた。自然に近い里山では人の力が及ばないことがほとんどだ。長雨や天災を乗り越えて、環境の変化を感じること。人の機微を感じること。自分の内面の声を感じることだ。

人の営みの集大成がここにある。

※この記事はTURNSとのコラボレーション記事です。「十日町　雲の上の集落」で検索すると他の記事もご覧になれます。

会沢・蓬平集落では移住体験プログラムの受入れを行っています。詳細はP19をご覧ください。

子育て世代の座談会

～後編～

8月号で十日町市での子育てについて語っていただいた座談会。子育てをキッカケに始めたこと、成長した子供の教育、子育てを通して気づく地域のこと。ライフステージが変化すると見え方も変わってくるようです。前編は8月号に掲載しています。十日町市ホームページより電子版をご覧ください。

Q. 十日町市の教育環境はどう？

馬場　自分のまわりは中学受験している人も多くて、都心と比較した時の不安だと学習環境の差が少し心配かなぁ。今はオンラインで学習ができる環境になってきてるけど、自分の時と環境も違うから、それがどうなるかな。

滝沢　学校は十日町市に限らず、周辺地域の学校に通わせている人もいるみたい。結局は本人のやる気次第なのかな。

馬場　中学校くらいだと友達の影響がすごくあるって言うの聞いていて、すごい勉強が出来る子がいると、そういう子に引っ張られていくっていう偶然もあるのかなと思うけど、人数の母数とか影響するのかな。まだ未知数だけど。

高橋　学力だけで測るのもどうなのかなって思いますよね。偏差値で測れないものをどう測っていくのか、教えていくのか。「『生きる力』の育成」が学習指導要領にも載ってきてるように、私達の時とは違うかもしれない。

馬場　都会では出来ない学び方、例えば、カブトムシをすぐ取りに行こう、蛍をすぐ見に行こう。そういうのを自分の体験としてできるのは良いよね。学力とどう結びつくのか、まだ分からないけど「幼少期の原体験をつくる」とか「非認知能力を育む」ことは十日町で出来ることだと思う。

高橋　そういう分野は「学び」のゴールがある訳じゃないですからね。都会の学びがいいか、地方の学びがいいか。答えは出ないけど、コンクリートの上でずっと暮らすよりもたくさんの学びを得られているのではないかな。

子育てを機会に自分達で学びをつくる

高橋　勉強や偏差値に固執していくと、それなら都心の方が…ってなってしまう。偏差値で測れない学習機会は子育てが始まって見えてきた部分も多いかな。

馬場　単に自然の中で育てるってだけじゃなくて、自然保育や自然体験できる施設もたくさんある。ポポラやキョロロみたいな場所が身近にあるのは良いよね。

高橋　私も農家だから子育てしながら食育だったり、お母さんも経済的に社会と繋がれる機会をつくれたらと思って農産物を加工して販売し始めました。子供も大人も子育てを通して学ぶ機会っていうのは作りやすい環境だと思う。

滝沢　そういう風に地域に出てくる女性が増えてきたら、地域もまた変わってくるよね。

馬場　私も中里地域の干溝っていうところで森づくりに取り組んでいる。地元の人が「オラの森を使ってくれ」って、私有地の森を開放してくれて、「干溝縄文の森」っていう名前で森を整備してて、田沢小学校の小学生が毎週通って自然体験をしてくれてる。

高橋　地域にまだまだ足りないことも多いから、自分のやりたいことで埋められる余白があるのは都心に比べて良いところかもしれないですね。教育も仕事もなければ自分でつくっていこうっていう気持ちを持って暮らしてます。

子育てスポット特集

子供と一緒にどこで遊んだら良いだろう。そんな悩みに「学びと遊び」をテーマに5つのスポットを紹介します。十日町市ならではの体験ができるはず。座談会に参加した子育て世代のみなさんに聞きました。

干溝（ひみぞ）縄文の森

「森を通じてあらゆる立場の人々が信頼で結ばれ、人と命、環境を大切にし、地域と子どもたちの未来のために、豊かな自然環境を次世代へ受け継ぐこと」をコンセプトに、有志で整備した森。「森の中」で遊ぶ楽しさや自然の怖さも一緒に学ぶ場として開放しています。

【施設情報】
運営者：干溝縄文の森　友の会
所在地：新潟県十日町市干溝ニ 414 番地 1
利用料金：無料
お問い合わせ：himizojyoumonnomori@gmail.com

桂公園こどもランド

「十日町市に子供を連れていける公園が欲しい！」そんな子育て家族の声を実現するために交通公園をリノベーションしながら管理運営する手作りの公園。2017 年に（一財）公園財団「公園・夢プラン大賞」において最優秀賞を受賞、2020 年によみうり子育て応援団大賞を受賞。全国的に注目されている公園です。

【施設情報】
運営者：NPO 法人桂公園こどもランド
所在地：新潟県十日町市中条丙 441-2
利用料金：無料　ゴーカートは有料
お問い合わせ：025-757-5901

十日町市児童センターめごらんど

めごらんどは十日町市に初めて出来た屋内・外で思いっきり遊べる児童センターです。屋内遊具にはチューブスライダーやエアキャッスルなど子どもが喜ぶ遊具が設置され、屋外のしばふ広場は遮る物がなく自由に遊べます。

【施設情報】
運営者：十日町市
所在地：十日町市学校町 1 丁目 808 番地 6
利用料金：無料
お問い合わせ：025-761-7707

越後松之山「森の学校」キョロロ

里山の自然と生き物をテーマとした参加体験型ミュージアム。
館内では地域の里山に生きる昆虫やヘビ、カエル等の様々な生き物に出会うことができます。このキョロロは、本誌でも取り上げた「まつのやま学園」の生徒たちの理科室のような場所になっています。

【施設情報】
運営者：十日町市
所在地：新潟県十日町市松之山松口 1712-2
利用料金：一般 500 円　中学生以下 無料
お問い合わせ：025-595-8311

あてま森と水辺の教室ポポラ

あてま高原リゾートの豊かな自然に囲まれたフィールドを利用して、さまざまなプログラムを展開しています。拠点となっている「森のホール」では、里山の自然や文化、暮らしを体感したり工作体験ができます。プログラムでは自然の音を聞いたり、生き物に触ったりと大人も童心に返って子供と一緒に遊ぶことができます。

【施設情報】
運営者：当間（あてま）高原リゾート・ベルナティオ
所在地：新潟県十日町市珠川 当間高原リゾート内
利用料金：施設入場料は無料
※各体験プログラム費は有料のため詳細は「あてま　森と水辺の教室ポポラ」ホームページ参照
お問い合わせ：025-758-4811

ミッション型　地域おこし協力隊　Jターン

久保田 智恵美さん

新潟県糸魚川市出身。新採用の養護教諭として松之山小学校に赴任後、文部教官、県教育事務所指導主事在職。指導主事在職中に多様な学校教育現場に触れ、学校運営・経営を志す。松之山中学校の校長として赴任した後、小中一貫校まつのやま学園の開校に尽力。定年退職後に現職。

十日町市の特色ある教育「まつのやま学園」

十日町市初の小中一貫校

２０２０年は「教育改革」の年だと言われています。10年に1度改訂される学習指導要領では小学校からの外国科やプログラミング教育が必修化し、「社会に開かれた教育課程」がキーワードになりました。

十日町市松之山地域。ここでも変化していく学校教育に対応するため、２０２０年４月に学園と地域の教育コーディネーターとして「ミッション型地域おこし協力隊」が着任しました。久保田智恵美さん、松之山中学校の元校長です。

「学校づくりは地域づくりなんですよ。教育資源がたくさんあって、学校のためなら何でもすると言ってくれる人達がいる。そういう環境に惹かれて、学校を選んでくれる人がいてもいいのではないでしょうか。」

まつのやま学園が小中一貫校として開校したのは平成29年４月のこと。これまでの小・中連携の取り組みが実を結びました。

「平成27年の学校教育法の改正が追い風となって、これまで行っていた小・中が連携した教育から小中一貫校へ時代が進みました。これから時代がどう変わっていくのか分からない。だから柔軟性は失いたくないんです。学校のためなら何でもすると言ってくれる人達の中には、昔、訳があって松之山を離れた人も大勢います。その方々から『今の自分があるのは、松之山の学校があったからだ』って話を聞くと胸が熱くなって」

久保田さんの思いの強さが伝わってきます。地域との関係が深いほど、学校をつくっていくことが、地域をつくっていくことと重なります。まつのやま学園の教育フィールドは校舎の中だけではないということを体現したカリキュラムとなっています。

「まつのやま学園は生活科・総合学習の授業を中核におき、体験で終わらせずに日常的な学びに繋げ、地域にひらかれた学校でなければなりません。地域の人が学校に来る、生徒の足音が地域のいろんなところで聞こえる。そういう存在でありたいんです。」

地域をフィールドに遊ぶ力を育てる

昨年、生徒数の減少で野球部が廃部となり、部活動の選択肢が制限されました。人が減っていくという現実は天変地異のようなものではなく、さざ波が岸壁を少しずつ削っていくように進んでいきます。それでも、まつのやま学園は「新しい選択肢」を見出しました。

村山大吾さん（写真右）はまつのやま学園に通う7年生。今年、創部したばかりのアウトドア部の部長もしています。

上手に米をつくるための授業じゃない、失敗したっていい

何もない日は学校の手伝いに集まってくれる地域の皆さん

今年新設されたアウトドア部の部長は7年生、中学部では1人だけだ

「走るの嫌だし、スキーも出来るけど嫌で、それでアウトドア部に入りました。近くのキャンプ場で、SUP(スタンドアップパドルボート)とかカヌーをします。その前は釣りも。トレッキングの時は『走るのかー』と思ったんですけど、活動は楽しいです」

学校が休みの日は、どこで遊んでいるのかを聞くと「マウンテンバイクで山道を走って、温泉巡りをしてる」と返ってきました。中学部は村山さんだけで、その他の部員は全員が小学部。合同で活動する時以外は1人で活動をしているそう。このアウトドア部をコーチとして支えるのは村山英明さん。松之山地域のキャンプ場やスキー場の運営の仕事をしています。

「このアウトドア部は、生徒の選択肢を増やすためだけではなく、ある種、まつのやま学園の勝負でもあります。『遊ぶこと』を通して松之山を知ったり、人と関わったりする機会をつくる。全国的にも小・中学生の部活動としては珍しいのではないでしょうか」

アウトドア部には出場する大会もなければ、コンクールがある訳でもありません。しかし、目的は自然豊かな松之山の中で遊ぶ力を身につけてもらうことだといいます。

「部員である彼らが成長して大人になった時、友人や周りの人を松之山に誘って、遊ぶために帰ってくるようになればいいなと思うんです。自分が育った地域を、子供達が一番興味のある方法で知ることをサポートしたい。それが将来の松之山になにかをもたらすはずです」

雪里留学で新しい人の流れをつくる

そしていま、新しい人の流れを生み出そうとする取り組みが進んでいます。久保田さんが提唱するのは「雪里留学」。開校時に認定された「小規模特認校」という学区外からでも入学できる制度を活用して、市町村や県の枠を越えて、豪雪地ならではの受け入れ体制をつくろうとしています。

「松之山は豪雪地です。昔から授業にもアルペンスキーやクロスカントリースキーを取り入れて、新潟県スキー連盟とも連携しながら多くの選手を輩出しています。私は京都や広島の学校とも交流があるのですが、『週に1回、自分の子供を富良野に通わせている』という保護者の方々もいるそうです。それなら学校に通いながら、毎日ウィンタースポーツができる環境を松之山につくれたらと思うんです」

久保田さんが進めている「雪里留学」はウィンタースポーツのジュニア選手に向けた長期・短期留学の制度です。そのためには宿舎や地域で市外の生徒を受け入れる体制をつくらなくてはなりませんが、松之山だからできるという手ごたえがあると語ります。

地域なしには存在しえない新しい時代の学びが、この里山の学校で始まっています。「教育ってマンパワーなんですよ」という言葉に込められた「学校を残したい」という強い思いは、きっと松之山を取り巻く全ての人たちに伝わっているでしょう。

※まつのやま学園の特集は「TURNS」43号（発行：株式会社第一プログレス）でもご覧になれます。

移住と起業のストーリー

「同じ体験を共有する喜びを知り、新たな挑戦へ」

まつのやま塩倉 | UIターン

嶋村彰さん・塩倉チーム

ホーリーバジル農家の嶋村彰さんと塩釜守（しおがまもり）の高橋泰明さんをはじめ、飲食店経営者、旅人、養蜂家、会社員のチームによる山塩づくりのプロジェクト。30代から40代の若手移住者が活躍しています。

パチパチと炎がはぜて煙が上がる工房には、まるで縄文土器のような佇まいの塩窯がありました。鉄釜で煮詰めているのは太古の化石海水。温泉として湧く1200万年前の海水を山奥の小屋で塩にしています。塩釜の周りに集まる6人はUターン者とIターン者の集まり。「まつのやま塩倉」は、それぞれが仕事を持ちながら『塩づくり』に関わるチームです。

「ずっと松之山温泉から塩が出来るという話は聞いていて、面白そうだなぁ、やってみたいなぁって思っていたんです」

嶋村さんが主宰していた「塩キャンプ」は夜中に焚き火で松之山温泉水を煮詰め、火を囲んで対話し、最後に出来た塩をおにぎりに振って食べる体験。これが事業の源泉となりました。

「同じ時間と体験を共有する。それが一番、楽しくて幸せで、心地良いことだなって。そこから塩づくりは始まっているんです」

少しずつせんごう（※）されていく塩の結晶を見ながら、塩づくりに込められた思いを語ります。

松之山に心を動かされた

嶋村さんが松之山で暮らすことになったのは、10年前に津南町森林組合で働いていた時、そこで何十年も働いている同僚の家を訪ねたことがきっかけでした。

「この地域に住みたいという逆らえない心の動きを感じて、家を買うことに決めました。最初は10万円で茅葺きの良い家を買って暮らしたんですが、地震で倒壊してしまって。その木材を組み直して、今の家に住んでいます。最初はゲストハウスのような人が集まる場所を作りたかったんですよね」

その家から見える越後三山に、かつて旅先で見た南アルプスの景色を重ね、足元に紫色の花が咲くホーリーバジルを植えた。いつかの旅で見てからずっと頭に残っていた「紫の花と遠景の雄大な山」の風景が見たいという心の動きがあったのだといいます。

「自分が心地良いと思ったことを大事にしていて、それが軸になって暮らしや仕事があります。でも、それができなくて、違和感を抱えて苦しんでいる人もいますよね。その時に松之山でしかできないこと、土があるから出来ることを一緒にやっていけるようになればいいなって思うんです」

※せんごう・・・海水などを煮詰めて塩を製造する工程

Happiness only real when shared.

人が集まる場所をつくりたい

窯の土は、この地の粘土質の土に嶋村さんが育てているホーリーバジルの茎をつなぎに練りこみました。「混ざっていたホーリーバジルの種が土の水分と熱で発芽したんですよ」と笑いながら嶋村さんは話しました。「生きている窯ができた」と喜んだそうです。

薪は、主に廃材を活用しています。そこにも塩づくりへのこだわりがありました。

「近年、海洋ゴミによるマイクロプラスチックが環境問題になっています。山塩は太古の海水を使っているので、人工物は入っていない安全な塩ですが、製造過程でも環境に良いことをなるべくしていきたいんです」

「色んな松之山の源泉で塩づくりを試しました。源泉によって味って全然違うんですよね。一番美味しかったのが兎口の源泉でした」

一つ一つのことに向き合い、自分の心を大事にしてきて辿り着いた松之山での塩づくり。嶋村さんがこの地域に住んでから、多くの人が集まってくれて、助けてくれて、滞在するようになって、繋がっていきました。それを途切れさせず、塩づくりを通して、雇用をつくり、この地域で暮らせる人や家族を増やしたい。「人が集まる場所をつくりたい」という昔からの思いが源流となっています。集落にも、環境にも、人の心身にも良い山奥での塩づくりを目指す挑戦は、まだ始まったばかりです。

1, 煮詰めていくとキラキラした結晶が見えてくる。焦げないようにゆっくりとかき混ぜる 2, 窯職人が最後に仕上げに指で紋様を描いた塩窯は既に風格がある 3, 大きな鉄鍋から小さい鉄鍋へ煮詰まった化石海水を移していく 4, 廃材を火にくべる。炎は窯の構造で上へ上へと熱を運び、3つの鉄釜を熱する 5,100ℓの源泉から1500gしか塩はつくれない 5,1200万年前の化石海水が命の塩となって目の前に現れた。かつて松之山でも塩づくりがされていたそうだ。6, 完成した塩を使ったスパイスやビールなどの加工品販売やコラボレーションも積極的に行う予定とのことだ。

首都圏 IT 企業　テレワーカー　Iターン

川島真理子さん

東京都出身。新卒で西東京市の腕時計メーカーに就職して広報を担当。キャリアアップの場を求めて 29 歳で IT ベンチャー企業に転職。BtoB 企業向けコンテンツマーケティングによる見込み客獲得をミッションに、マーケティング部に所属しテレワークで仕事を行う。

テレワークで働く「アフターコロナ時代の新しい働き方を十日町でも」

テレワークやオンライン通学が広がったときに、あなたの中に芽生えたのは期待でしょうか、不安でしょうか。新しい働き方なんて、まだまだ十日町には縁遠い話。そんな風に思っている方も多いでしょう。しかし、少しずつ変化の兆しが見えてきたようです。

川島さんが十日町に住み始めたのは2018年9月のこと。交際相手の転勤がきっかけでした。

「転勤が新潟県十日町市という2人ともあまり縁のない場所に決まって、私も転職して1年くらいだったので、どうしようかという気持ちでした」

川島さんが勤めるのはITベンチャー企業。前職の広報の経験を活かして、見込み客を獲得するためのコンテンツづくりやサービス資料の制作、メディアへの出稿を行う、マーケティング業務が主な仕事でした。

「社内ではデザイナーやエンジニアが地方でテレワークをしている前例はあったので、私も会社と交渉をして、本社で行っていた業務をそのまま十日町での在宅勤務にして持ってこれたんです」

転勤をきっかけに結婚が決まり、テレワークという形で仕事を継続できることになった川島さんは十日町での生活を通して考え方にも変化があったといいます。

月2回の東京出社が完全なテレワークに

「テレワークになって給与形態が変わって、最初こそ収入は大幅に減ったものの、会社の制度が変わってきたこともあり、今の収入は移住前と同程度まで戻りました。会社の方針もコロナ禍の影響から、週2～3日はテレワーク可に変わって働きやすくなりましたね。基本は自分でマネジメントして、3ヶ月ごとに「これをやる」「これを作る」「この事業を担当する」とミッションを決めて進めていく仕事の仕方なので、より自分の仕事に集中できるようにもなりました」

東京にいた頃は、どこか「戦っていた」ような生活だったと振り返ります。十日町は東京よりも人が少なく、自然に囲まれているけど田舎という訳ではない。プライベートでも登山の趣味が増えて、休みの日には地域の田植えイベントに参加するなど、十日町の自然環境を楽しんでいるといいます。

「十日町に住んで分かったのは、自分の住む土地を愛し、自分のやりたいことや強みをいかして何かを生み出している人はとても魅力的だなと。私もそうありたいですし、今後の人生で何かできることを見つけていきたいと思うようになりました。」

移住しようとしている人、帰郷しようとしている人も「十日町の会社で働けたら良かったですけど、今の仕事も捨てられないんですよね」という川島さんの言葉に共感することもあるでしょう。アフターコロナ時代の新しい働き方を取り入れる人たちから学べることがあるのかもしれません。

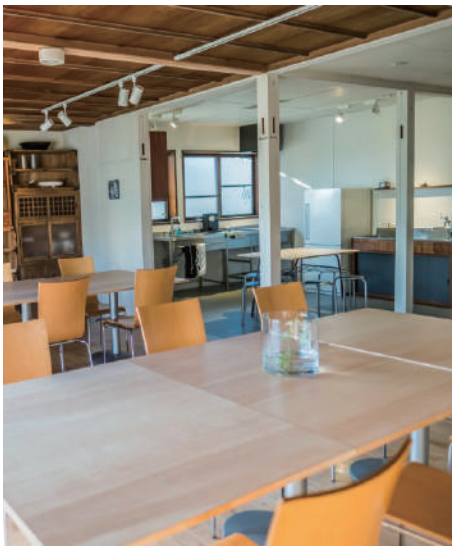
ワークスペース特集

「新しい働き方」が十日町市でも広がってきています。テレワークやオンライン通学、フリーランスや起業を応援する市内スポットを紹介します。

シェアアトリエ ａｓｔｏ

２０１８年10月に新潟県立十日町高校の目の前にオープンしたアトリエ＆コワーキングスペース。１日利用だけではなく、月額３０００円からの会員プランもあります。24時間利用が出来るのも便利なところ。会員はフリーランスのカメラマンや副業の動画編集者、新しい事業を始める準備を進めている方や都内の大学にオンラインで通い始めた地元の社会人など多種多様。新潟県から「スタートアップ支援拠点」に認定、起業や新規事業の相談、支援及びクラウドファンディングのサポートを行っています。

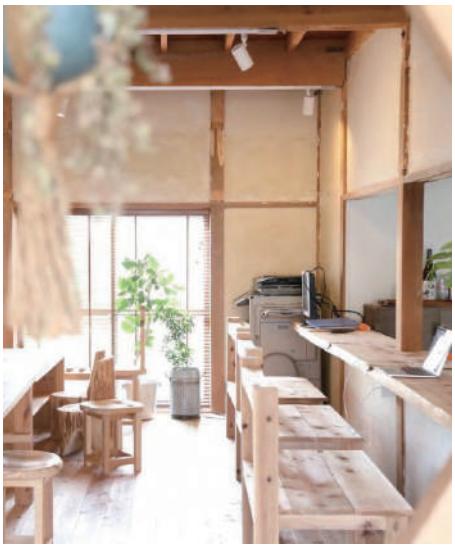
【施設情報】
運営者：有限会社瀧長商店
所在地：新潟県十日町市本町二丁目３２０
利用料金：月額利用料３０００円～／ドロップイン初回無料（要問い合わせ）
お問い合わせ：info@asto-t.jp または Facebook



みんなの家

十日町市水沢地域にあるワークスペース＆シェアハウス。元地域おこし協力隊の井比晃さんが隊員時代に地域の人たちと一緒に始めた新しい拠点です。広々としたキッチンを使ったホームパーティーにも最適。２階は個室で滞在ができるようにもなっています。月額４万円で全国各地の拠点に滞在し放題という「多拠点居住サービスＡＤＤｒｅｓｓ」にも登録さ れていて、全国各地から旅人が集まります。新しい人の流れが出来そうですね。

【施設情報】
運営者：ＮＰＯ法人 水沢んしょ
所在地：新潟県十日町市馬場丁１２５３－２
利用料金：貸切利用３０００円～
テーブル利用１０００円 ／１時間
お問い合わせ：０９０・４９６１・１１５１
または mizusawansyo@gmail.com



Yabukozaki outdoors（やぶこざきアウトドアーズ）

本誌でも取り上げた小山友誉さん達が運営する松代・蓬平のカフェ＆キャンプ場。広い窓から見渡す山と雲海の景色は絶景です。この場所を拠点に里山体験やマウンテンバイク、スキー、スノーボードなどのアクティビティを提供するほか、棚田のガイドも実施しています。ワーケーションがキーワードになっている中、いつもと違う環境でリフレッシュできるのではないでしょうか。仕事も遊びもしたいならオススメのスポットです。

【施設情報】
運営者：松代やぶこざきの会
所在地：新潟県十日町市 蓬平８２９
利用料金：キャンプ場利用料金に含む（要問い合わせ）
お問い合わせ：yabukozaki@gmail.com

出身者インタビュー

「とおかまちに帰りたい人々」

大正大学　地域創生学部　４年生

村山 凜太郎さん

2017年３月新潟県立十日町高校卒業後、地域活性化を学ぶために上京。佐渡市・十日町市を中心に多様な地域プロジェクトを企画。地元に活かせる知識・経験・繋がりを育ててＵターンを目指す。

それぞれの理由があって地元を離れた出身者の人々。その中の一人、村山凜太郎さんは十日町高校を卒業した後、東京にある大正大学地域創生学部へと進学しました。

「実家を継ぐのが嫌でした。そのまま地元に残れば道は決まっているし、楽だったと思います。それよりも東京でいろんなことを経験して成長したいと高校生の時に思っていました」

村山さんは、地元で燃料店を営む会社の長男として育ちました。高校生までは地元の良さについて考える機会はなく、漠然と地元を離れたい気持ちが強かったといいます。

転機は「越後つまり１００㎞徒歩の旅」という地域の取り組みに、ボランティアとして参加したことでした。

「ボランティア研修の時に移住者の方と会って、十日町のことをよく考えるようになりました。地元の面白さだったり、将来地元とどう関わっていくかだったり、進路選択の時に学校では学べないことを考える機会があったのは恵まれていたと思います」

その時に、大人と高校生の世界の分断、地元の人と移住者の人間関係の分断があることに気づいたという村山さん。地元を見る視点が変わっていきました。

学ぶことへの意識が変わった

地域活性化を学問として学ぶ大学や学部が増えています。そのアプローチの仕方は環境学や公共政策である場合もあれば、都市工学や建築、社会学など幅広く多様な側面から学ぶことができます。机の上だけが学びの場所ではないという気持ちで、フィールドワークを通した学びを重視するようになった村山さんが一番通ったのは、地元ではなく「佐渡市」でした。

「大学に進学してから友人を十日町に連れていくために、今まで以上に地元のことを調べました。そうしたら、住んでいたのに知らないことばかりで、むしろ移住者の人に教えてもらうことの方が多かったです。それで『外からの視点』って大事なんだと思って、大学で研究・活動をする地域は佐渡にしたんです」

棚田の保全活動や地産品の販路開拓といった十日町でも出来そうなことを別の地域で行うのは、将来、『外からの視点』を地元に対しても持ちたいからだといいます。

「地元を良くしたい、地元に帰りたいという出身者は周りにも大勢います。でも、彼らがいつ帰るのかといえば、みんな目処は立ってません。そういう人達のために、もっと勉強して経験をして外からの目線で、みんなが『帰ってくる場所』をつくりたいですね。地元で頑張ってくれている人達、いつか帰りたいと思っている人達を繋ぐ役割になれたらと思っています」

大学の卒業を控え、進路は佐渡市の地域おこし協力隊だといいます。実家があり家業があるからこそ、地元にまだない「＋α」を持った自分を育てて帰りたい。そんな思いを持って地元を離れた彼が見据えているのは、未来の十日町の姿でした。「帰りたい」と願う人達のために、私たちは何ができるでしょうか。

十日町市の企業の挑戦

花水農産

十日町市の農業を支える誇り

十日町市を支える魚沼産コシヒカリの栽培。農家の高齢化が進む中で水田の管理が難しくなる場所も増えてきています。そんな水田を代理で管理・栽培を請け負うのが花水農産の仕事の一つです。

困ったと頼られたら放っておけないよ」と話すのは代表の宮内賢一さん。中条地域を中心としながらも市内全域に管理を任されている水田があります。

そこから栽培される花水農産の米はGLOBALG.A.P（グローバルギャップ）の認証を得ています。これは、食品安全、労働環境、環境保全に配慮した「持続的な生産活動」を実践する優良企業に与えられる世界共通ブランドの認定です。

「地域の農業を支えていかないといけない」と使命感を持ち、稲作に向かうだけではなく買い物に出かけづらい高齢者に定期宅配をし、地域の雇用も守り続けています。

フレグランスピーチの人気

「新しいことにチャレンジしないと、続いていかないからね」と始めたのはフレグランスピーチという珍しい品種のイチゴ栽培。市内で栽培しているのは花水農産だけで、桃の香りがするピンク色のイチゴです。イチゴ栽培は、宮内賢一さんと伴走して花水農産を支える宮内隆和さんが、農業大学校卒業後に就農して、市内でいち早く着手しました。

「今年でイチゴ栽培は18年目。コロナの影響で在庫が出てしまっていたのですが、普段は出していないSNSで発信したところ、5分で160パック以上の在庫が完売するほどの人気でした」

その独特な香りと風味を活かして高単価で販売すると共に、加工品やスムージーなどの商品開発に挑戦しています。

地域の商工団体と連携して、新しい取り組みを増やしたい

農業だけではなく、中条地域の商工業と有志の商工団体を組織して農業・商業・工業を繋げるプロジェクトにも取り組んでいる花水農産。「ふるさと納税の返礼品の開発やイベントを通して地域を盛り上げたい」と中条農商工れんらく会を組織して、地域の事業者が新しいチャレンジをする土台にするのだといいます。

花水農産は、農業を通して地域を支える企業を目指し、日々挑戦をしています。

あなたの新しい暮らしを支援

U・Iターンに関する補助金制度

01
UIターン世帯補助金

40 万円

市外から移住すると最大40万円支援

02
東京23区からの移住支援金

100 万円

東京23区内からの移住で単身60万円、家族なら100万円の支援

03
結婚定住補助金

40 万円

地元在住女性が市外男性と結婚して、市内に2人で住むと最大40万円支援

1～3を使う方には
更なる制度が！

check!
運転免許取得代または通勤定期券代を最大10万円支援

check!
新築で最大60万円、中古住宅取得で最大20万円、市が販売する土地の購入なら最大100万円支援

04
ふるさと回帰UIターン補助金

新潟県外に5年間住んでいた方が、2020年6月19日～2021年2月28日の間に移住すると単身30万円、家族なら50万円の支援。さらに実家または持ち家で暮らす場合は支援額が2倍に。

申請期間　2020年7月20日～2021年3月15日

加算メニュー

- 自宅のテレワーク
- 通勤定期券を購入
- 住宅用土地を購入
- 中古住宅を取得
- 運転免許の取得
- 新築住宅を取得
- 実家をリフォーム
- リフォーム

05
十日町市結婚新生活補助金

24 万円

市内で結婚したら引っ越し費用を最大24万円支援

※01～04のいずれか1つを申込可

Information

とおかまちのしごと・求人を紹介するウェブサイトが始まります！

サイトオープン12月中旬予定！

「#とおかまちのしごと・求人図鑑」は、十日町市の仕事や企業、働き方を通して地域の魅力を伝えるウェブサイトです。求人情報はもちろん、活き活きと働く皆さんや新しい挑戦をする企業を取り上げます。

情報を掲載していただける市内事業所を募集中！掲載費は無料です！是非、お問い合わせください。

【補助金制度及びウェブサイトに関する問合せ先】　担当連絡先：十日町市企画政策課移住定住推進係 025-755-5137

Information

移住体験プログラム

十日町市では移住検討者やＵターン希望者の方向けに２種類の移住体験プログラムを用意しています。興味のある方は、ぜひお問い合わせください。【参加申込期間　令和３年１月31日まで】

1. テレワーク型

（35,000円～・大人１名７泊８日の場合）

本誌でも紹介したワークスペースなどを活用しながら、仕事と暮らしを体験できる１週間のプログラムです。滞在先はゲストハウスや一棟貸しの古民家など希望に合わせて選ぶことが出来ます。

2. 体験交流型

（7,000円～・大人１名１泊２日の場合）

本誌でも紹介した会沢・蓬平集落、大地の芸術祭作品「うぶすなの家」がある願入集落または若手移住者達が農業を中心に活躍する黒倉集落に滞在して、地域の方々と交流をしながら十日町市の暮らしを体験できます。

担当連絡先：(株)Home away from Home Niigata　/　info@homehome.jp

地域おこし協力隊に
関心のある方はこちら！

Information

お試し地域おこし協力隊

地域おこし協力隊を検討している方は、まずお試し地域おこし協力隊として集落に入ってみませんか。２泊３日から１か月間の間で、実際の仕事や活動する集落の様子を知ることができます。

左：来年の４月着任を目指す元お試し地域おこし協力隊。期間中、中学生のお子さんは「まつのやま学園」に通っていたそうです。

担当連絡先：(一社) 里山プロジェクト　025-595-6670

アンケートのお願い

冊子で取り上げて欲しいことや情報があれば、是非ともアンケートフォームからご要望いただけたらと思いますので、みなさまからのご意見やご感想をお待ちしておりますね！

広告協賛の募集

十日町市のＵ・Ｉターン促進情報誌に広告を掲載しませんか？
掲載料は１枠５万円からご用意しており、冊子の増ページや増刷のために大切に使わせていただきます。詳細はお問い合わせください。

制作チーム

企画・文　大塚眞
デザイン・写真　ほんまさゆり
アドバイザー 堀口正裕（TURNS）
編集　森川真実（TURNS）

制作　株式会社第一プログレス：雑誌 TURNS 発行
　　とかとこ：十日町市の移住者夫婦による編集プロダクション

発行・問い合わせ先

十日町市企画政策課移住定住推進係
〒948-8501
新潟県十日町市千歳町 3-3
TEL:025-755-5137
FAX:025-752-4635
MAIL:t-kikaku@city.tokamachi.lg.jp